



写真-1 堀川橋から京都丹後鉄道宮豊線・円山川橋梁を撮影（令和6年8月）

■ 「かばん」のルーツ～杞柳細工

写真-1 は、一般県道 548 号戸島玄武洞豊岡線・堀川橋（ワーレントラス橋 L=306.7m、1974 年架）から京都丹後鉄道宮豊線※1・円山川橋梁を撮ったものです。この橋梁は平成 22（2010）年 4 月に架け替えられたもので、旧橋は昭和 4（1929）年に架けられ、約 80 年間、地域の交通を支えてきました。旧橋の橋脚に使用されていた石材やレールは、モニュメントとしてコウノトリの郷駅に設置されています。

また、堀川橋の両岸に広がる豊岡市は「かばんの町」として知られていますが、そのルーツは、江戸時代に始まる杞柳細工（きりゅうざいく）にあります。円山川下流には杞柳製品の原材料となるコリヤナギの生育に適した荒原（あわら）と呼ばれる湿地帯がいくつかあり、写真-1 の河原にも、かつてはコリヤナギがたくさん自生していたそうです。

なお、円山川橋梁の下流に見えるのが昭和 56（1981）年に架けられた国道 178 号の豊岡大橋で、その前方に見える高い山は標高 566.58m の来日岳（くるひだけ）です。



写真-2 堀川橋



写真-3 京都丹後鉄道宮豊線・円山川橋梁

※1 京都丹後鉄道宮豊線：元は国鉄・JR西日本の路線で、平成2（1990）年4月1日から北近畿タンゴ鉄道（KTR）が運営を引き継いでいたが、平成27（2015）年4月1日からはWILLER TRAINS（京都丹後鉄道）を第二種鉄道事業者、KTRを第三種鉄道事業者とする上下分離方式によって運行されている。上下分離が行われた際、宮津線については宮津駅を境に東側（西舞鶴側）24.7 kmを「宮舞線」、西側（豊岡側）58.9 kmを「宮豊線」として路線愛称を分離した。全線単線で、天橋立駅～豊岡駅間は非電化である。

■ 柳行李の原材料・コリヤナギ

コリヤナギは、ヤナギ科ヤナギ属の落葉広葉低木です。朝鮮半島原産の雌雄異株で幹は株立ちし、高さは2～3mになります。ヤナギと聞くと枝が垂れた「シダレヤナギ」を想像しますが、コリヤナギの枝は右の写真-4のように上に向かって真っすぐ伸びていきます。

早春、その株から芽吹いた新芽は、春から夏にかけて幹を伸ばしながらぐんぐん大きくなります。葉は十字対生（互生・3輪生のものも混じる）し、長さ6～12cm、幅0.6～1.2cmの線状披針形※2です。

ヤナギ属で対生の葉があるのは、本種とイヌコリヤナギの2種のみで、イヌコリヤナギは葉の幅が広いので簡単に見分けられます。



写真-4 柳の宮神社の鳥居近くに植えられていたコリヤナギ

このコリヤナギの皮を剥いだ幹を編んでつくられたのが柳行李（やなぎごり）で、着物の衣装箱や収納箱、薬箱、弁当箱などに使われていました。製品は軽くて風通しがよく、吸湿性、調湿性、防虫効果があります。名前は行李を編むための柳、「ごりやなぎ」が詰まったもの。

※2 披針形：葉や花弁などの形を表す語の一つ。竹の葉などのように、細長くて先がとがり、中ほどから下部がややふくらむ形。

■ 1200年の歴史をもつ豊岡杞柳細工

杞柳細工の起源は、垂仁天皇3（279）年、新羅国の王子・天日槍（あめのひこ）の伝授によるものという説が語り継がれています。奈良の正倉院には、但馬の国で編まれた柳筐（やなぎばこ：柳行李のこと）が「御物（ぎぶつ）」として10数点納められています。安土桃山時代、城下町の形成とともに産業としての歩みが始まり、豊臣秀吉に行李を献上したという記録が残されているとか。

江戸時代になると、寛文8（1668）年5月豊岡藩に移封された京極高盛が柳行李を代表とする杞柳細工の生産を奨励するとともに、コリヤナギの栽培・保護・加工・編みの技術育成を進めました。以後代々の藩主も熱心に杞柳産業を保護奨励したことで雪深いこの地域で冬越えの仕事として根付いたそうです。

宝暦13（1763）年12月に触書ハケ条が出され、これにより規格保持が命じられ、札場を通じて価格操作が行われるなど、強力な藩統制が打ち出されて、柳行李が藩の専売品となります。

これによって柳行李が商品として天下の台所・大坂に移出されただけでなく、さらに江戸市場への進出を目指すなど藩の経済を支える産業として重要視されるようになります。



写真-5 柳行李（豊岡市観光公式サイトから引用）

明治時代になって文明開化を迎えると、豊岡かばんのルーツとされる「ベルト締めof 行李鞆」が発明され、明治33（1900）年「パリ万国博覧会」にも出品されました。

その後、大正時代末期から昭和にかけて「ファイバー鞆」が製造され、柳行李の販路を活用して全国に販売を伸ばし、“豊岡のかばん”のブランドイメージが確立されました。

■ 柳行李の生産奨励に伴いコリヤナギも栽培へ

柳行李の発祥の地と考えられているのは、立野大橋右岸部の梶原・庄境(しょうざかい)両地区で、円山川の低湿地です。豊岡盆地は、日本海から約 15km 内陸にありながら、日本海との高低差は約 2m に過ぎません。このため、円山川は豊岡盆地を蛇行して流れ、水はけの悪い湿地帯(荒原)をいくつか残していました。豊岡の杞柳産業はこの荒原に適応し自生していたコリヤナギを原材料として、籠を編む技術が発達し洗練されてきたものです。

行李を編む麻糸は、古来但馬麻苧(あさお:麻糸)として知られ、また行李に使う縁竹も容易に入手できました。

江戸時代初期になると、かつて荒原に自生していたコリヤナギも、柳行李の生産奨励に伴い作り手それぞれの畑で栽培するようになります。原材料のコリヤナギは、以下の工程を経て、ようやく使用できるようになります。

- ① コリヤナギの栽培(摘芽、除草など): 材料となるコリヤナギは自然条件に対する順応性が高く、1 年で 1~3m ほど伸びます。また挿し木によって増やすことができ、2~3 年で 1 株から数十本に分木します。
- ② 柳刈り(12月初旬): 毎年、本格的な冬が来る前に刈り取ります。
- ③ 冬越し: 刈り取った柳は束ねて、水を張った円形の溝に立て、そこで冬を越します。
- ④ 仮差し(3月初旬): 皮を剥ぎやすくするために、1 本 1 本仮差しをして芽を出させます。
- ⑤ 皮剥き(5月初旬): 芽が出たら地面から抜き、根の部分の泥を洗い流し、金子箸(かねこばし)という 2 本の股になった鉄棒に通して、1 本 1 本皮を剥いていきます。
- ⑥ 乾燥(数日間): 剥ぎ終わると水洗いをして天日で乾燥させます。白く輝く柳行李の材料「白柳」の出来上がりです。



図-1 豊岡市街を流れる円山川

■ 北但大震災で柳行李加工場がすべて焼失する

明治時代後期から大正時代初期にかけて、杞柳産業は海外にも進出するなど進展の一途をたどっていきますが、大正 10 (1921) 年頃を境として、第一次大戦後の不況のあおりを受けて急速にかげりが見えてきます。アメリカからの引き合いは減少し、不振の兆しが色濃くなりますが、それに追討ちをかけたのが、大正 14 (1925) 年 5 月 23 日に起きた北但大震災です。

火災を起こした豊岡町（現・豊岡市）の被害は大きく、被災した工場法適用工場 16 のうち 15 は柳行李加工場でしたが、全工場が焼失しました。製造過程の最終段階の縁かけ・ズック付けに従事する職人は豊岡町に集中していたので、その 7～8 割方は被災し従業不能となりました。また、生地編みに従事する編み工は周辺の田鶴野（たづの）村※3・三江（みえ）村※4に多く、その被害も少なくありませんでした。豊岡町の杞柳原料および製品の販売業者総数 130 戸が被害を受け、販売業者・加工業者の店舗・工場・家屋は貯蔵した多量の原料・商品とともに焼失しました。製品および原料の被害高は 50 万円余（『北但震災誌』）とも 60 万円余（『北但大震災記録』）ともいわれています。

商取引は中止となり生産・注文とも一時激減しましたが、販路の拡大や時代の要望に沿った製品の改良に努めた結果、その復興は意外に早く 9 月に入りほとんど元の状態に復興したそうです。

※3 田鶴野村：城崎郡にあった村で、現在の豊岡市中心部に北接する地域、円山川の右岸および一日市（ひといち）にあたる。田鶴野の由来は「田」は鶴城城主の田結庄氏。「鶴」は下鶴井。「野」は野田庄であったとされる。明治 22（1889）年 4 月 1 日町村制の施行により、船町村・山本村・金剛寺村・森村・宮島村・野上村・下鶴井村・赤石村・一日市村の区域をもって発足。昭和 18（1943）年 4 月 1 日豊岡町に編入。同日田鶴野村廃止。

※4 三江村：城崎郡にあった村。現在の豊岡市中心部の東北東一帯、円山川の右岸、京都丹後鉄道宮豊線・コウノトリの郷駅の周辺にあたる。明治 22（1889）年 4 月 1 日町村制の施行により、法花寺村・祥雲寺村・南谷村・馬路村・鎌田村・下宮村・庄境村・梶原村・日撫（ひなど）村・六地藏村の区域をもって発足。昭和 18（1943）年 8 月 1 日豊岡町に編入。同日三江村廃止。

■ 杞柳産業の今

昭和 47（1972）年の日中国交回復以降、安い製品が大量に輸入されるようになり、杞柳産業は急速に競争力を失っていきます。そして流行の基調変化、製作技術者の高齢化などにより杞柳製品の生産は減少していきます。

こうした中、平成 4（1992）年に「豊岡杞柳細工」が国の伝統的工芸品の指定を受けました。新たな展開の道筋が見えかけてきたとはいえ、後継者の確保・育成や技術・技法の継承など、大きな課題があります。前途多難ですが、それでも「伝統工芸士」の資格を取得された方が生まれるなど明るい話題も少しずつ出てきています。

■ 但馬三大祭りの一つ・豊岡柳祭り

豊岡柳祭りは、但馬三大祭りの一つで毎年 8 月 1、2 日に行われます。昭和 10（1935）年、「但馬五社」の一つである豊岡市小田井町の小田井縣神社（おだいあがたじんじや）の境内社である「柳の宮神社」の社殿が新築されたことを機に、杞柳産業の繁栄を願って始められました。柳の宮神社は、かばんの神様として地域で親しまれており、地元の特産品である豊岡かばんや柳行李の守護神として知られています。

なお、柳の宮神社を管理する小田井縣神社（本社）は、昭和 6（1931）年円山川治水工事のため現位置に移転し、約 40 年後の昭和 44（1969）年に堀川橋改築、堤防増強工事のため、境内の模様替え、えびす神社、川下神社、社務所の改築が行われています。



写真-6 小田井縣神社



写真-7 柳の宮神社

■ モノローグ

かつて円山川に自生していた杞柳細工の原材料・コリヤナギをテーマにして書こうと、平成 27（2015）年に玄武洞ミュージアム内の「豊岡杞柳細工」を紹介するコーナーを見学するなどネタ集めをしていましたが、肝心のコリヤナギを見たことがありません。写真で見ても、やはり実物を見ないと話にならずテーマはお蔵入り状態に。

ところが、令和 6（2024）年 7 月に別件で小田井縣神社に行った際にデモ用に植えられていたコリヤナギを偶然見つけ、以後俄然書く気が出てきて 10 月初旬に書き上げることができました。 “百聞は一見に如かず”

トノサマバッタ（殿様飛蝗）

バッタ科トノサマバッタ属に分類される昆虫の一種。ダイミョウバッタ（大名飛蝗）とも呼ばれる。体長 35～65mm の大型のバッタで、オスよりメスの方が大きい。緑色型と褐色型の 2 つのタイプがある。平地～低山地の日当たりがよくイネ科植物の多い草原に生息するが、平地の広大な草原は河川敷くらいしかないので、その生息地も河川敷である場合が多い。



写真-8 円山川右岸堤防上で撮影したトノサマバッタ

【参考資料】

- 1 『豊岡市史 上巻』 豊岡市史編集委員会編 昭和 56 年 3 月
- 2 『豊岡市史 下巻』 豊岡市史編集委員会編 昭和 62 年 3 月
- 3 『広報とよおか第 147 号～市政ニュース』 豊岡市 平成 23 年 5 月
- 4 『葉と枝による樹木検索図鑑～コリヤナギ（ヤナギ科ヤナギ属）』
<https://elm3.web.fc2.com/top/ha-no-kaisetu/koriyanagi.html>
- 5 『コリヤナギ』 四季の山野草 HP
https://www.oook.net/cgi/shikihtml/shiki_2889.htm
- 6 『日本語大辞典～披針形』 監修：梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明 平成元年 11 月
- 7 『豊岡文化協会会報「円山川」第 60 号』 豊岡文化協会 平成 24 年 4 月
- 8 『但馬の百科事典～杞柳細工』 公益財団法人たんしん地域振興基金
<https://tanshin-kikin.jp/tajima/1257>
- 9 『豊岡市観光公式サイト～城下町出石に残る伝統工芸【杞柳細工（柳行李）】』 一般社団法人豊岡観光イノベーション
<https://toyooka-tourism.com/recommend/tradition/kiryu/>
- 10 『小田井縣神社』 兵庫県神社庁 HP
<https://www.hyogo-jinjacho.com/data/6322003.html>
- 11 『豊岡市観光公式サイト～豊岡柳祭り』 一般社団法人豊岡観光イノベーション
https://toyooka-tourism.com/event/yanagi_matsuri/
- 12 『京都丹後鉄道宮豊線、田鶴野村、三江村、豊岡杞柳細工、北但馬地震、小田井縣神社、柳まつり、トノサマバッタ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 7（2025）年 2 月 『ひょうご水百景』 No.216

改訂：令和 8（2026）年 8 月 『ひょうご水百景』 No.216